

機関番号：25405

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20720025

研究課題名 (和文) 北方画家のローマにおける注文制作に関する研究

研究課題名 (英文) Study on the commissioned works by Northern painters in Rome

研究代表者 深谷 訓子 (FUKAYA MICHIKO)

尾道大学・芸術文化学部・准教授

研究者番号：30433379

## 研究成果の概要 (和文)：

本研究では、1570 年から 1630 年までの期間に北方（とくにネーデルラント出身）画家がローマで得た注文制作の作品を手がかりに、彼らのイタリアにおける活動に関する知見を深めることを企図した。各種文献を用いて注文制作作品を突きとめていくことでその全体像をつかむと同時に、具体的な成果として、ローマで彼らのパトロンとなった美術愛好家たちとの関係、とくにスペイン系のコネクションのあり方についても新知見を得た。

## 研究成果の概要 (英文)：

In this research it is attempted to achieve a clearer image concerning the activities of Northern (especially Netherlandish) artists in Rome between 1570 and 1630, by studying the works commissioned to them. The general view is achieved through pieces of information on the commissioned works found in many monographs or recent researches. The most remarkable fruit of this research has been a couple of new facts concerning the artist-patron relationships, especially those concerning Spanish connection with Northern painters in Rome.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：西洋美術史

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：美術史、芸術学、オランダ美術、バロック美術、美術の南北交流、カラヴァッジスム、パトロネージ

## 1. 研究開始当初の背景

イコノクラスムの直後であり代表的ロマネストが没した時期にもあたる 1570 年代から、オランダ美術がその明確な特色を打ち出し始め、ローマではベントと呼ばれた北方画家たちの団体が活発に活動し始める 1620 年代は、ネーデルラントの画家たちが熱心にイ

タリア美術を吸収しつつ、一方で北方独自の規範形成に向かった重要な時期にあたる (W.S.Melion, *Shaping the Netherlandish Canon*, Chicago, 1991 等)。にもかかわらず、彼らのイタリア (ローマ) における活動には、今なお不明な点が多い。カラヴァッジスト研究においても、北方画家のイタリア時代に関

する情報はいままお不足している状況である (Slatkes and Franits, Hendrick Terbrugghen, 2007 などにも同様の所見)。

また、17 世紀前半から活動をはじめ、やがてローマの聖ルカ・アカデミーに対抗する一大勢力になってゆくベントの草創期についても、かなり早くから興味深い情報が挙げられているにもかかわらず (Hoogewerff, De Bentvueghels, The Hague, 1952)、設立時の詳細は未だ明らかになっていない。確かに作家別に見ればイタリア時代に的を絞った研究も存在するし (G.Papi, Gherardo delle Notti, Gerrit Honthorst in Italia, Soncino, 1999)、各種個別研究の中にも散発的な言及は見られる。だが問題はそれらの情報がひとつの像を結んでおらず、彼らの活動の全体像が把握されていないということにある。そのため現在では個々の作例についてある程度の詳細を得ても、それが特殊事例なのか典型的なのか明言しがたいことも多い。もちろん時代を限定せずにみれば、美術の南北交流に関しては様々な成果が挙げられ、広く学術的関心を集めている (一例として Exh.cat., Fiamminghi a Roma, 1508-1608, Bruxelles and Rome, 1995)。だが、本研究で設定した 1570 年代から 1620 年代に限って言えば、まだまだ絶対的な情報量が不足していると言わざるを得ない状況であった。

## 2. 研究の目的

こうした状況を受け、1570 年から 1630 年にかけて、低地地方出身の画家がローマで注文制作した作品を可能な限り包括的に目録化し、そのうち、示唆に富む作例 (意外な影響関係を示したり、重要なパトロンと関連があるなど) に関しては、注文・制作の経緯や作品の評判、現地の画家との関連性などに着目して個別の調査を行うことにより、これまで曖昧な像を結ぶにとどまっていた、イタリアにおける北方画家の活動の実態と、彼らの人脈のより詳細な解明を目指した。その際、実際にはどの程度の画家が現地で注文を得ることができたのか、さらに現地での評判や平均滞在年数といった具体的な知見を積み重ね、全体像に迫ることを目指す。こうした調査の過程で、のちのオランダ美術の規範形成や自己定義、ローマにおける北方出身の画家団の結成時の詳細、現地の画家との関わりなどに関わる情報が見出すことも目的のひとつである。しかしその際に、古代彫刻の素描、ルネサンス期の作品の学習、イタリア人画家との作品の交換など、余りにも多岐にわたる彼らの活動全てを漠然と対象にするのではなく、低地地方からやってきた画家が「ローマで得た注文」という視点を設定することにより、同時期の絵画の趣味や彼らの人脈など、より具体性をもった知見を獲得する

ことを目論んだ。

## 3. 研究の方法

まずは注文制作の全体像を明らかにするため、当該時期にネーデルラントからローマに赴いた画家たちをリストアップし、モノグラフ等にあたって注文制作作品 (もしくはそう想定されるもの) を列挙する。こうした全体像の把握と併せ、興味深い事例を選択して、個別の事例研究を行うことにより、画家の作風変化、主題選択や、ローマで特に積極的に北方画家を支えたパトロンのことなど、より具体的な知見を得ることを試みる。

まず画家のモノグラフやフォッカーの先行研究 (イタリアの教会に存在する北方画家の作品の一覧) を用いて、リストアップのための情報収集を行った (2008~09 年度。その後の作品研究のため、イタリア、とくにローマの教会にある北方画家の作品の実見調査を行った (2010 年 9 月)。また 2011 年 2 月には、そうしたフィールドワークの結果を成果としてまとめるために、ミュンヘンの中央美術史研究所での資料収集及び補足調査を行った。

## 4. 研究成果

主だった画家のモノグラフをはじめ、上述のフォッカーの先行研究や、展覧会『ローマのフランドル人たち』などに関連した近年の研究成果にあたることにより、当該時期における北方画家のローマ旅行について概要を把握することができた。現段階では文章の形でまとめていないが、この作業は継続して行う予定である。またこの調査の過程で (設定年代からは外れるものの)、ローマ旅行という伝統の嚆矢となったファン・スコーレルの意義について検討しておく必要性を感じ、ヤン・ファン・スコーレルのイタリアでの活動、エルサレム巡礼、そしてそうした経験を経て祖国ネーデルラントに持ち帰った成果について、北方的なジャンルのひとつと目されてきた「集団肖像画」を例に考察し、学会発表を経て図書の一章として刊行した【業績 学会発表の②及び図書の①】。

また研究を進めていくなかで、やはり北方出身のカラヴァッジストが如何にしてローマでパトロンを見出し、どのように関係を築いていったかということに焦点が絞られていった。そのため、文献等を用いての予備調査を進めた上で、2010 年に集中的に現地調査を行った。まずバロック期の祭壇画等を有するローマの教会をまわり、北方画家の制作した作品を中心に実見調査を行った。なかでも主たる目的としていたサン・ピエトロ・イン・モンテ・リオのバビュレン作《キリストの埋葬》及び同礼拝堂内の作品については、礼拝堂の実際の環境内での作品設置状況や

視覚的効果をよく検討することができた。同じくトラステヴェレ地区にマールテン・デ・フォスが制作した祭壇画を有するサン・フランチェスコ・ア・リーパ教会でも実見調査を行った。ほかに、サン・ルイジ・デイ・フランチェージ教会、ジェズ教会、サンタ・マリア・デイ・ヴィットーリア教会、サンタンドレア・デッラ・ヴァッレ教会、サンタ・マリア・イン・トラステヴェレ教会、キューザ・ヌオーヴァ、サンタ・マリア・マッジョーレ教会などを周り、やはり同様に北方画家の制作した作品や、その着想源となった可能性が高い作品を中心に調査を進めた。ガレリア・コロナでも、同様に北方画家の作品を実見した。またサン・ピエトロ・イン・モンテリオのバビューレン作品に関連して、同画家の初期作品を有するボルゲーゼ美術館でも作品の実見調査と比較検討を行った。

フィレンツェでは、『フィレンツェのカラヴァッジョとカラヴァッジェスキたち』展における絵画作品の実見調査及び資料収集を行った。幸運なことにこの展覧会においても、またそれと関連してヴィッラ・バルディーニで開かれていた展覧会でも、バビューレンの初期作品を実見することができた。一度の調査旅行で、知られており現存しているバビューレンのイタリア時代の作品については、その大部分を見ることができたのは僥倖であった。

こうした調査の結果を、ミュンヘン中央美術史研究所における文献調査で精査、検討し、バビューレンの代表作《キリストの埋葬》には、スペイン人パトロンへの対応を背景に取り入れられた、ティツィアーノの同主題作品からの引用があるのではないかという考えを持つに至った。また、この説の検討の過程で、広く歴史学の成果なども参照し、当時の人間関係等を追うなかで、バビューレンとスペイン人、もしくは親スペイン派の人脈とのつながりについて、ある程度確実な新知見を得ることができた。いわば（元）宗主国であるスペインとネーデルラント人画家の関係についてはさらに検討すべき点が残されているが、バビューレンに即して、その具体的な一例を紐解くことができたと考えている。この成果は、学会において発表した。論文として発表することを念頭に、現在追加の調査中である。【業績 学会発表の①】

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

- ① 「〔原典資料翻訳〕カーレル・ファン・マンデル『絵画の書』（一六〇四）（十二）」、深谷訓子、尾崎彰宏（共訳）、『美術史学』

第31/32号（2010/11年度号）、2011年、127-152頁（査読有）

- ② 深谷訓子、「テル・ブリュッヘンのカラヴァッジズムをめぐる再考察 —《聖マタイの召命》と《聖トマスの子信》を中心に—」、『平成19年度～平成22年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書（課題番号 19320026）模倣の意味と機能をめぐる研究-写す・抜き出す・変容させる（研究代表者：京都大学大学院・文学研究科・教授・根立研介）』、2011年3月、79-106頁（査読無）
- ③ 深谷訓子、「17世紀オランダにおける素描教育 —工房の外へ：『線描帖（Tekeningen）』と裸体素描」、『尾道大学芸術文化学部紀要』第10号、2011年3月、41-55頁（査読無）
- ④ 深谷訓子、「17世紀の美術文献における版画論の展開」、『尾道大学芸術文化学部紀要』第9号、2010年3月、31-43頁（査読無）
- ⑤ 深谷訓子、「17世紀オランダにおける画家組合の展示室（toonkamer）」、『平成17年度～平成20年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書（課題番号 17320029）前近代における「つかのまの展示」研究（研究代表者：京都大学大学院・文学研究科・教授・中村俊春）』、2009年3月、175-200頁（査読無）
- ⑥ 「〔原典資料翻訳〕カーレル・ファン・マンデル『絵画の書』（一六〇四）（十一）」、深谷訓子、尾崎彰宏（共訳）、『美術史学』第30号（2009年度号）、2010年、117-124頁（査読有）
- ⑦ 「〔原典資料翻訳〕カーレル・ファン・マンデル『絵画の書』（一六〇四）（十）」、深谷訓子、尾崎彰宏（共訳）、『美術史学』第29号（2008年度号）、2009年、199-213頁（査読有）

〔学会発表〕（計2件）

- ① 深谷訓子、「ディルク・ファン・バビューレン作《キリストの埋葬》の図像源泉と注文主」、第64回美術史学会全国大会、同志社大学、（2011年5月22日）
- ② 深谷訓子、「ヤン・ファン・スコール作《エルサレム巡礼者たちの肖像画》考察」、広島芸術学会第24回大会、広島県立美術館（2010年7月24日）

〔図書〕（計1件）

- ① 蜷川順子 [責任編集]、今井澄子、平岡洋子、木川弘美、平川佳世、深谷訓子著、『初期ネーデルラント絵画にみる〈個と宇宙〉 I 人のイメージ 共存のシミュラクル』2011年、ありな書房、（第6章「集団

の肖像 ヤン・ファン・スコーレル《エル  
サレム巡礼者たちの集団肖像画》  
(163-191頁)を執筆)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深谷 訓子 (FUKAYA MICHIKO)  
尾道大学・芸術文化学部・准教授  
研究者番号：30433379

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし